

# 「白石先生琉球人向対」について

宮崎 道生

## 一、白石と琉球

白石の琉球への関心が何時始まったかは俄かにきめられないところであるが、他の外国に対する関心（政治的意味をもつもの）と同様、幕府政治への参与とほぼ同時と見てよいであらう。而してこの場合は、宝永七年における恒例（將軍代始）の中山（琉球）使節の束聘がそのきっかけになつてゐるものと判断される。

日記に拠ると、同年三月三日の條に、

(1) 「琉球ノ日記御わたし」（大日本古記録本、新井白石日記下、に拠る）

とあり、十月に入ると、

(2) 五日、「琉球人御目見の座席等御尋二付、即刻図シ上ル」

(3) 八日、「昨日琉球返翰上ル」（上同）

(4) 九日、「今日琉球図返上」

等の諸記事が見えてゐる。(1)の琉球日記の拜借によつて生れたものが、新井家に現存する「琉球束聘事載」（註）であらうが、白石の琉球研究の出发点は恐らくここにあると思はれる。(2)は、いふまでもなく琉球使節が將軍に謁見する場合の座席に關する答申書提出、(3)は、琉球使節の帰国に當り持参すべき徳川將軍の返翰の草案を進上したことを指して居り、(4)によつて、白石が琉球の地図を借覽したことが知られる。（註2）なかんづく、(3)の返翰の起草は、事が形式的ながらも外交問題として重要性をもつものであつたことから、白石が、我國と琉球との關係につき正確な知識をえようと努めたで

あらうことは、容易に推察されるところである。  
この宝永七年の末聘の際、白石は琉球使節と面会した。この面会については、日記は記載を欠くが、折たく柴の記には次のごとく比較的詳しい記述がある。

「<sup>(十月)</sup>同十一日、明日京におもむくべきために参る。御前にめされて、……………かくて同十二日にう

方たつ。かねては、琉球の使こゝに至らむ後に、打たつべかりしを、風使よからずして、来るべき期を<sup>アキ</sup>憶りしかは、其来るを待つに及ばず。同廿四日に、京に入りぬ。此日琉球の使、大津の駅に至りき。十一月の十一日に、御即位の儀を観る事を得たり。……………」

「辛卯年正月乙日、天皇御玄服の儀を觀たり。

……………その、ち、琉球の使、聘事終りて帰るとて、伏見に來りと、まると南て、同八日に、かしこにある薩摩守の筈にゆきむかひて、美里、豊見城両王子等に相違ふ事を得たり。これかねてより仰下されし事ありしが故也き。」<sup>(巻中、白石自筆本に於る)</sup>  
これによれば、使節の江戸到着をまつて上洛へ東

山天皇御即位拜觀等のため）する予定であつたのが、天候の都合で到着の期日がおくれた為、それをまたずに十月十二日に出発し、翌宝永八（正徳元）年正月八日に至つて、伏見の薩藩邸で美里、豊見城両王子と面会しえたことが知りれる。

次に、正徳四年の琉球使節末聘の際にもまた、白石は面談の機会をもつた。日記には、十二月十八日の條に、

「松平薩摩守方は参上、琉球人對話、暮時歸ルと見え、島津吉勲邸で面会したことが知られる。

これが機縁となつて白石の琉球研究は著るしく進展するが、他方また、白石の詩集へ白石餘稿——実は白石詩草——が琉球を通じて清朝シナに渡り、翰林院學士鄭任鑰によつて紀讃されるきつかけが生れることにもなるのである。<sup>(註3)</sup>なほ、この正徳四年度の末聘に關して、返翰の書式が問題となつたことから、再び白石が豊見を徴せられた事情は、折たく柴の記に詳記されてゐる。

琉球が我國と清國とに面属してゐること、かつ清國が對外経略を推進しつつあつたこと、等に氣

付いたことから、白石は琉球外交を重視するに至つたやうで、水戸の安積藩泊などにさういふ観竊を洩らしてゐるが（新案手簡）、これについて（註4）は別の機会に詳述したので、ここでは省略する。致仕以後白石は、琉球関係の著述を幾つかものしたが、それらの中一般に知られてゐるものが南島志と琉球国事略とであり、ともに学向的に價值高きものであること定評のあるところである。

## 二 白石の琉球関係著作

白石の琉球関係著作の代表は、南島志である。南島志といふ書名に固定するまでの向には、琉球考、南倭志等の呼び方がなされてゐるが、（註5）享保四年完成の際にこれに落着いたやうである。本書は、

地理才一 世系才二 官職才三 宮室才四

冠服才五 礼刑才六 文藝才七 風俗才八

食貨才九 物産才十

の十章から成る体系的研究書で、多数の参考書に拠りつつまとめ上げたものであることは、一読して明瞭である。

もう一つ、成書として琉球研究書には、右の南島志以後に書かれた琉球国事略（註6）（五事略）所収）がある。これは南島志にくらべれば餘程簡略であり、しかも和文で書かれてゐる。その内容は、吳朝の書に見えし琉球国の事・琉球国人所申某国の事、琉球冊封使并朝貢使の事、等で、大綱においては南島志と変るところはない。この事略の方は、その執筆時と記載の内容とから見て南島志を基にし、それを簡略化して書いたものと思われるから——勿論多少の補訂はある——、いま向題外として、南島志の参考文献に注意して見ると、和漢の証史書、地理書、法制書・系図類等を主とし、シナ官吏、日本僧侶の琉球紀行等をも参考したことが知られるほか、次のとき字句が散見することに気付くのである。

(イ) 美向甲午使人、以三山分城。対曰、今歸仁以北之地称山北、……（世系才二、白石全一集才三、六九頁）

(ロ) 出于庚寅甲午使人等所記中山官制、（官、取頁。四）

(ハ) 美嘗聞之甲子使人、曰、我王称尚氏始於恩紹

王。……(官職才三頁)

(二) 美嘗聞之甲午使人曰、正殿上層奉神之所、

……(宮室才四頁)

(本) 庚寅使人所作図皆如此。甲午之冬、美請謁其

王子、爵服制鳥紗帽、麟袍、象笏、金帶、……(爵服才五頁)

七頁)

(ハ) 甲午使人曰、本國旧俗、詳見袋中書、百年以

來民風大變、……(風俗才八頁)

以上のうち、(ロ)、(本)に見える庚寅は宝永七年であ

り、全部に通じて見える甲午は正徳四年に当るも

のである。

偶然の機会から、昨秋私は「白石先生琉人向対」

なる写本を手に入れた。内容を検討した結果、こ

れはまさしく正徳四年度の琉球使来聘に際しての

質疑応答の記録であり、右にいはゆる「甲午使人

曰」云々の記事と対応する記載を含むものである

ことが判明した。他書の場合から類推するに、本

向対は白石自身の纂輯にかかるものであらう。よ

つて以下、全文を掲げ記すと共に、南島志を始め

他の著作との関係をも併し明らかにしようと思ふ。

### 三 「白石先生琉人問対」の内容

後に全文を掲げることであるから、詳述は避けるとして、一応本書の構成と内容とにつぎ要点を指摘しておこう。原本の記載の仕方に従へば、本書の構成は次のやうに四部分から成ると見るのが適当であらう。(註)

I 琉球使節に対する白石の復向とその応答——正徳四年十一月、向目16條

II 薩摩藩家中衆に対する白石の復向(「別啓」と題す)とその応答——同四年十二月、問目8條

III 琉球使節に対する白石の復向とその応答——日付なし、向目24條

IV 同右(前書あり、主として対清朝関係事項)——日付なし、向目18條

次に内容を類別すると、ほゞ次のごとくになる。

(一) 琉球王家関係事項……1 2 3 4 50

(二) 対明朝、対清朝関係事項……5 9 15 16

34	59	60	61	62	64	65	66	(計12)
(三) 政治法制関係事項……	13	25	28	29	30			
31	32	33	35	49	55	56	(計12)	
(四) 経済社会関係事項……	14	26	27	54	(計			
4)								
(五) 地理物産関係事項……	6	7	6	14	36			
37	38	39	40	41	42	44	52	(計13)
(六) 言語習俗趣味関係事項……	12	17	18	19				
20	21	46	47	48	58	(計10)		
(七) 生活様式関係事項……	23	45	50	51	53			
57	(計6)							
(八) 宗敎関係事項……	10	11	22	51	(計4)			
(本文)								
	(原本には句読点・返点等がつけられてお見ないのので、今かりに、それらを加へて御訂正を乞ふ。)							
問	目							

一 異朝の書に、琉球の国姓は尚を以て称する由を  
しるし候物有之候。王諱に尚の字をかゝれ候事  
は、尚思紹王より事始り候致。尚の字を姓とせ  
られ候來由有之致の事。

附 一書に、其王歡斯を姓とし、其名は渴刺  
嚙妃をば多拔茶と申由をしるし候文も有之候。  
其国に伝へられ候事も有之候致の事。  
答(朱書) 中山王称尚氏、始於思紹王、然用尚姓、其由  
來伝記不相見也。隋書云、王姓歡斯氏、国人  
呼之爲可老羊妻。曰多拔茶所居、曰波羅檀洞  
之類、盖古昔之語而今其語言無有也  
二 冊封の時、先王の廟を祭る、礼候由にて候。  
此時、謚を贈られ候致。もし贈謚の典有之候は  
は、代々の王謚承度候事。  
答冊封時諭祭前王、歷代有典、但贈謚之典、未  
曾有也。  
三 前王尚益、在位の年数并其壽いかほにて候し致、  
承度候事。  
答尚益王嗣祖尚貞王立、四年而薨。享年三十五  
四 今王の春秋いかほにて御なり候致の事。  
答近王春秋、十五歳。  
五 大清の代となり候て始は、入貢の事はいつれの  
ころにて候致。順治のころは、函慶の地いたた  
その新化に服せず候間、進貢の道路ふさかるへ

至事に候を以て相尋候事。

答 大清之初、琉人在閩。順治三年、閩平則琉人

歸服清朝。翌四年、清朝勅使帶琉人末琉国、

為招撫。九年、勅使再臨本国、令繳納大明勅

印。同年、琉球使者從勅使送印、赴清朝乞賜

清朝勅印。時當海賊蠢起、海路不通。至康熙

二年癸卯、勅使到中山、封尚質王。王遣使謝

恩。翌年又遣使、慶賀。自康熙五年始為進貢、

以兩年一貢為例。

<sup>6</sup> 中世に山南山北と申候は、當時いつれの地名を以

山南といひ、山北と申候歟の事。

答 昔者、今歸仁以北之地称山北。山北王、在今

歸仁城。大里以南之地、称山南。山南王、在大

里城。

<sup>7</sup> 異朝の書に琉球の地名をしるして

太平 古米 馬齒 硫黄 葉壁 又熟壁とも 灰

堆 繇奴 野刺普 吉佳

等の名有て、就中、葉壁は日本に近き地のよし

にて候。太平、古米等は承久候。野刺普は、永

良部の事を唐音にてしるし候と見之候。然らば、

其餘にも唐音を以てしるし候も可有之歟。これ

らの地名、いかゞ候歟の事。

答 輿論島、繇奴、永良部、野刺普、鬼界嶋、吉

佳、皆以唐音稱之。

<sup>8</sup> 鷄籠は葉壁に遠からず候由、相見之候。いかゞ

候歟の事。

答 鷄籠山在琉球国西南、葉壁在国北。其間相去

甚遠。

<sup>9</sup> 大明洪武年中、閩の三十六姓の人を給られ候由、

くに／＼これらの子孫、有之候歟の事。

答 大明洪武時、賜閩人三十六姓。至中世雖凋謝

其子孫傳迄今受祿者、在百餘人也。

<sup>10</sup> 百餘年前、日本の僧琉球に在る事年久しく、其

土の風俗をしるし候書に、神の事をつまひらか

にしるし候所に、キンマモン、キライカナイノ

キンマモン、ヲホツカクラノキンマモン、七年

一回のアラ神、十二年一回のアラ神、又山神、

次郎五郎の両童をしたかへて出現し、ヲウチキ

ウト申す海神出現し、又キシテスリと申す神出

る時は、アヲリといふ物現すと申す事有之、此

事の子細詳に承度候事。

答萬曆年間、日本僧袋中在琉国、詳記神道之事。

然百年以來、国俗大變、今也不聞神出現之事。

11 又神あらはれて託女に託し候事等も其書に見え、神怒る時は腕折れ折して神に謝し、又神を以て毒蛇をまじしなひ候事も見え候事。

答于今無此等事。

12 古は一丈三尺の布を以て頭をまとふ。ワキナクニといふ人、今の冠を繫すと云事見え候。いかにか候坎の事。

答今有此説。薄板作冠、用絹冠之。

13 職名の中、筑登之、いか、とはへ候坎の事。

14 其国にタシカといふ樹、シキユといふ草候よしに候。いかなる物に候坎。阿檀、又いかなる樹に候坎の事。

15 其国より福州への海路險難の由に候。いか、候坎の事。

16 福州の館舎、北京の会同館、其廣狭いかほとに候坎の事。

答琉球到福建海路、殆幾五百里許。那霸港揚

帆過古米山、自翌日無一山、可見上天下水、

蒼茫萬里、況往以冬至前後、北風迅厲、巨濤

如山。帰帆以夏至以後、又至夏秋之際、常有

颶颶。康熙四十年辛巳夏、中山王遣使、送颶

風商人入南。琉使返棹時、在江南蘆之外破船

四十一年壬午夏、接貢船一隻没於海中、四十

八年己丑孟秋、進貢船一隻又没於中洋。同年、

又進貢船一隻到本國近海被擄。以上四船、皆

十年上下之事也。以前之難、舟或遇海賊、或

飄他方、或没中途、其數不可勝記。

右の條々、いかやうにも事の子細をしるし給り

候様に、よろしく其国の人之被仰付被下候は、

可添候。以上

(朱書)  
正徳五年午

十一月

新井筑後守

別啓

17 琉球国中の言葉、其国の郷談多かるべく候。日

本のことばにちかく候坎、唐に近く候坎。次ら

は又其風俗も日本に近き方に候坎。薩州にて御

覽及はれ候所、いかほとに候哉の事

答 琉球に用候言葉は、惣して唐、日本勿論、本

より琉球の言葉を取合用申候と相見之候得共、唐言葉の方多分聞之申候、風俗の義も、唐に近くみ之申候。次郎と申候名は、輕重者の通名と相聞之候。次郎と唱申候由に御座候。

18

一文字を用ひ候事、異朝の事は漢文たるへき事、勿論に候。其外世のつねのとりあつかひ、又は下賤の者の類は、日本の文字つかひに候哉。又其国にて用ひまり候文字等も有之候哉の事。

附 只今承及候地名など、大かたは日本の文字つかひに候。古より如此の事に候哉。但し近年如此に候哉の事。

一答 薩州江の通融、訖ど仕候事斗に漢文用候。

尋常は和文を以通融仕候得共、有子細儀なとは、乍ら通申候。下賤の者は、琉球言葉を漢字又は日本のいろはを以、通融仕候と見え申候。琉球一国の文字は無御座候。

一地名などは、就中、唐、日本、琉球の音を卷合て唱末候。其内、全日本の唱の所も有

之、三字に唱候所を二字は日本音、一字は琉球音などに唱候所も御座候。

19

其国の禮に、公卿の袖結と申事有之よしに候。只今も国中にては此禮式候哉の事。

答 袖結と申事は、干今有之候。此節參候琉球人、針持などの袖笠を結んで、在すきのごとく仕候か袖結のよしに御座候。

20

女の針衝とて針にてさし、墨をいれ候事有之よしに候。いか、候哉の事。

答 此儀干今有之由御座候。

21 変身とて男変して女のごくになり候事、時々有之よしに候。いかしさやうの事も相聞之候哉の事。

答 近年は承及不申候。

22 神の記し候女、そのかしらたう候ものは南補君と申し、三十三人有之、田舎に有之託女は猶其数多候よしに候。いまも其風俗に候哉の事。

答 南補君と申は、干今壹人有之候。是は神を祈候女の由に御座候。

23 国中の人家は板敷を用ひ候か、敷瓦などに候哉。

近末は毎年異朝の風俗うつり候て、むかしより美麗に近く罷成へき事に候。いかゞ相見之候哉の事。

答 園中の人家は、大方板敷瓦を用申候。勿論、茅屋も御座候。近年は琉球も毎度天災有之、五穀不熟仕候二付、前よりは還而實業罷成、致困窮候と相見之申候。

<sup>24</sup> 園中にての商売は、錢を用ひられ難哉、又は穀物等にかへ候哉。昔は貝を用候由、申請候文も候。いかゞ候哉の事。

答 園中の新瓦は、大かた穀物を以替申候。錢は前より琉球一國に用候哉御座候、是も漸々破捨、近年は殊の外致減少候由御座候。兎も少しハ用申候得共、近年は琉球へも渡し下申候故、對而少有之由に御座候。是に申請候者曾而承反不申候。

右之通、琉球之參候者共、見聞仕候由申候。

以上

(朱書)  
正徳四年午

十二月

右者御家中の家、御見及候所を承度行候。以上

### 問 目

<sup>25</sup> 王子、倭漢の例に准し候は、國王の子弟の許たるべく候。然るに、寛文の時の使も金武王子と申し、此度も金武王子、使にて候。此度の王子は寛文の使の人の子孫にて候哉。然らば、國王子弟の稱とも見えす候。但し、王子の子孫は代々王子と申て、其家も定りたる事に候哉。但し又、王子とは正一品の職名と見え候。よはたとひ王の子弟にはあらす候とも、其職に任し候へは王子と稱し候哉。

答 王子者、琉球官号也。王之子弟、皆賜地以稱某地王子。雖為王之子弟、未得某地、不稱王子。或又雖非王之子弟、任其官則稱王子。

一 今年使官金武王子者、先年使官金武王子嫡孫進從一品王子。

一 任王子家、不有定數。

<sup>26</sup> 姓名異朝の書にみえ候所は、琉球の人は先祖又は其身の領し候地を以、姓名とするよしに候。

吳那城・金武を始め、其餘の人の姓名、皆、地名とはみえ候。然らば、我國の人の家跡の中、在る父と申すこと共に、先祖以末稱し束り候在名の家跡にて候歟。または、我國のいにしへに国主・郡主・庄司など申候類のこと共に、當時其地の事をいさとり候時は、其地名を稱して姓名となし候事歟。

〔答〕姓名者、以轄地名、雖爲姓名、親雲上・里之子

〔答〕荒登之内、有名無地者亦有。

27

〔尚敬と申は、只今の国王の姓名と見之候。然らば、王子をいしめ、みなノ／＼姓名あるべき事に候。たとへば、吳那城・金武と申は姓にて候。わが国にて実名など申もの、可有之事歟。もし実名無之候ては、寛文の時の金武王子と此度の金武王すと、相わかつへき採舞之候歟。此外、延宝の時にも知念親雲上と申有之、宝永の時も知念親雲上と申す有之、延宝の時にも濱川里之子と申有之、此度も濱川里之子有之類、其人と相わかつ難くあるべきに候歟。

〔答〕國人各自有姓名、如日本実名。

28

〔按司むかしより我國にて彼国の事を記し候ものに、いつれの地の按司と申事いくらもみ之候。我國にてたとへ候は、其所の奉行職など申類にもあるべく候歟。此職に任し候事も、代々其家数など定りたる事にも候歟。

〔答〕按司者、司郡者也。人数不定。

29

〔三司官、倭漢の例に准し候は、三公三卿など申類にあるべく候歟。此職の人、国の政事をいさとり候歟。

〔答〕三司官三人、天曹法司、地曹法司、人曹法司、執国政者也。

30

〔親方王子と申し、按司と申す類は、字儀におゐて大方にも心得られ候。親方と申事、心得かた候。たとへば、我國の俗語に、其家の長たる人を親方と申事候。しかれば、彼國にても尊称にて候故に、按司につき候職名となし候歟。

〔答〕親方者、親戚之儀也。任其官属親戚。

31

〔親雲上字義につきて見候へば、たとへば我朝にて殿上人など申す類にて昇殿をゆるされ、異朝にて堂上官など申事のこと共にみ之候。又、親

雲上の三字をバイキンと称し候由に候。此義い  
かなる事に候歟。察し候処は、親雲上の職は黄  
色巾をゆるされ候故に、黄巾と申唐音を用ひ、  
ハイキンとは中事の様におもひやられ候。いか  
し可心得候歟。

一客親雲上者、琉俗呼唱牌古米、或又呼唱牌金、  
非唐音、誤音唱者也。親近也、雲上殿上也。

<sup>32</sup>一里之子、此名義いかなる事に候歟。

一客里之子者、司色里者之子。無色里者之子、亦  
此言。

<sup>33</sup>一筑登之、此名義いかなる事に候歟。

一客登之者、以樂器稱之。登下節之義也。

<sup>34</sup>一清朝の進貢の時の職名に、都通事・才符使官舍  
使・在船都通事・存留通事・北京大筆帖・福建  
大筆帖・福建小筆帖・使贊・管船直庫・總官・  
北京總官など、申候事、皆く其役儀の様子いか  
し候歟。

客進貢人職名

一都通事者、大譯也。

一文府使官舍使、司金銀者也。

一在船都通事、司船者也。

一存留通事、在福州守琉球館者。

一北京大筆帖、在北京司書記者。

一福建大筆帖、在福建司書記者。

一使贊、正使耳目官之從官、猶日本之樂力。

一管船直庫、船頭。

一總管、在船上察天妃娘娘。

一北京總管、護貢物者。

<sup>35</sup>一間切、琉球の地名にいつれの同切と申所多く候。  
我国にてたとへ候は、いかやうの所を同切と  
は申候歟。

一客間切者、日本置郡一般。

<sup>36</sup>一永良部、琉球の地名に永良部と申処、爰かしこ  
に有之候。いかさまにも其地の舩により候て、  
名つけ候事とみえ候。いかし可心得候歟。

客不知何故名。永良部、琉球有同名島兩地。

<sup>37</sup>一城の字、彼国にての訓はタスクと申候事とみえ  
候。忽して、城の事をは如此申す国語に候歟。

客城字訓、見須久音、俗語也。

<sup>38</sup>一泡盛酒、此酒の事は異朝の書にもみえ候。琉球

の越、何方にても造り候事歟。但し、其地も定候歟。元盛の外にも、酒有之由に候。我國の地に似たる物に候歟、又いか、有之候歟。雲朝の書にみえ候造り方などは、心得かたく候によりて相たつね候事に候。

答琉球製焼酒。而元盛者、独首里得之酒醪配酒。

製法、日本一同。

<sup>39</sup>芭蕉布、芭蕉を以て織出し候事歟。但し、我國の芭蕉にては織出し難かるへき駄に候。我國の芭蕉は、其性もかはり候歟。但し、又製法も違へ候て、いづれの地の芭蕉にても織出さるへき事に候歟。

答琉球無霜雪、芭蕉冬不枯。故昔及三季、製而為布。不知日本芭蕉可為布。

<sup>40</sup>蔗糖、雲朝の書には、琉球の甘蔗は菓子に候由見え候。琉球の地、いづれの地にも出来候事歟。我國にてもう急つけ候は、暖まる地には出来るへく候歟。阿蘭陀人えたのね時に、我國にては出来かねも仕るへき歟、と申候さ、琉球にて

出来候上は、此国にても出来るへき事歟と存候いか、可有之候歟。

答甘蔗、日本亦植則可長。不知汁液可及生琉球者。

<sup>41</sup>阿檀、此木我國にていづれの木に似候歟。

答不知日本樹木比阿檀者。

<sup>42</sup>クシカ・シキユと申草候由、みえ候物有之候。此草いかやうの物に候歟。

答不知琉球有此草。

<sup>43</sup>櫻もみち、我國の櫻もみち等、彼国にも候歟。もし有之候は、彼国にてはいか、申候歟。

答雜樹紅葉、薩州一樣。櫻楓沒有了。

<sup>44</sup>魚、昔年草木鳥獸の事は尋候き。魚の事は不承候、いかなる物共候歟。鯨などのことき大魚も見え候歟。其外、鰯鯉などの類も候歟。

答有鯨、無捕者。鰯鯉有。

<sup>45</sup>食料、琉球にて常の食物いか様に候歟。飯を用ひ候歟。味噌なども用ひ候歟。亦我國の料理を嫌らひ候事歟。

答食物、日本一般。用「乾薑」。

<sup>46</sup>文字、文字とりあつかひの事、我國に對し候ては我國の文法を用ひ、異朝へ對し候ては異朝の文法を用ひ候とは相見え候。但し、これらは國中にて常の通用の事とはずへからず候。其國中にて下賤の類までも用ひ候所、殊には女人などの通用し候所を以て、其國中常の通用の事はみゆへき事に候。いかゝ相見え候哉。

答國中卑賤、字「日本伊呂波」、以為「俗言通用」。女人自古無採筆。

<sup>47</sup>「樂」、惣して樂の數十二有之由に候。十二之名承度候。亦異朝の書には舞も有之候て、見物し候由をしるし候舞樂も有之事に候哉。

答樂名數十二

萬年春 玉街行 賀聖明

喜昇平 樂清朝 慶皇都

永太平 鳳凰吟 飛龍引

龍池宴 金門樂 風雲會

一古有「舞樂」、今也無有。但作「世俗之舞耳」。

<sup>48</sup>「詩歌」、萬國の中、其所々の風俗によりて唐詩和歌のこゝくなる方がひは候へ共、いつれの國々にも詩歌のこゝくなるもの候て、其性情の感し候所を言葉にのへあらはし、もてあそひ候物のなき所はあらざる習ひに候。琉球にても本より其國俗にて、詩歌に似たる物も候哉。

答「唐詩習和歌」、慰情。又似「詩歌慰性情者」、有「琉球」。

琉球國封王の時の使として異朝より渡り候人、玄の／＼其國の事共しるし候書物共有之事に候。但し、其書物共の中、前後時を同じく仕らす候故哉、しるし候所不同有之、心得かたき事共候につき、異朝の書共にみえ候事の中、相尋候問目

<sup>49</sup>琉球の官名、王親・法司官・察度官・那霸港官、

耳目官、以上は武職なり。

太夫・長史・通事、以上は文職にて、専ら朝貢の事をつかさどると云々。

これらの官名、我國にて承及候所と同じからず候。定て異朝の文字にて右のごとくにしてしりへ候とも、眞実是我國にて承及候職名の外に、これらの官名有之候にはあるへからず候歟。但し、進貢の時に耳目官を正使とし、正儀太夫を副使とし、又封王の時謝恩使には紫金太夫をこされ由相見之候へは、これらの官は其時にあつて命ぜられ候事歟。我國にてむかしの人しるし置候ものにも、古米村に林は太夫と申せし人有之候事を載せる物も候得は、太夫と稱し候官も有之事に候歟。又異朝の書に、王子は之の之の其地に住して、大礼儀式の時に王城に至り候と申事有之候。今も王子などは、常に在所にて居住の事に候歟。但し、常に王の城下に居住の事に候歟。

答此官名、見於武備志及諸書。然用字少差。

一王親、王之親戚、即今之王子及按司也。王之

子膺封稱王子、王子之子受封稱按司。

一法司官、王之三卿執國政者、則三司官也。

50

一案度官、祢那霸里主、那霸港官、祢御物城、俣二員、治那霸四邑長官也。

一耳目官、有六員、賴法司官。進貢中華時、必命一員遣之。

一紫金太夫、正議太夫、長史通事等官、在又米村。所謂三十六姓之子孫、世掌表章者也。

一昔在三王子、封諸子、即令在郡邑守其土。尚巴志王一統三山、召郡守、皆居中山城下。迄今爲然。

今爲然。

王殿の制、那霸港の迎恩亭よりして天使館といふ館に在る。その館より國門迄三十里許道のりつもと、此間は路はしくは中山といふ嶺のあり所よりは路はいらかなり。其かたはらは石垣あり。國門をは歡會門といひ、府門を漏刻門といふ。王の密室は山の巔にあり。殿門を奉神といひて三階なり。門外に小池あり。これを瑞泉といふ。正殿は西向なり。殿閣二層にて上を寢室とし、中を朝室とし、下は臣下の座なり。かたはらに樓あり。又、南に向ふ殿あり。みなく

板を以て互に加ゆ。又、国に瓦屋はすくなく、  
多は草ふきにて地に席して坐す。是は我國の風を用ゆる事歟。  
右、異朝の書にみえ候所にて候。いかゞ如此候  
歟。

答王殿樓閣、昔者皆用板蓋之。至順治年間遇回  
祿、其後以瓦代板。凡房屋座用瓦。所謂席地  
而坐者是也。

<sup>51</sup>寺、国中の大寺は、天界寺、圓覺寺也。其餘は  
小寺也。此二寺、共に山門、佛殿共に王宮にさ  
しつぎたるものなり。座上に池ありて花草を植  
ゆ、其中に、見事なる蘗鉄一本あり。

是又、異朝書にみえ候所にて候。天界、圓覺寺、  
何家の寺にて候歟。右、異朝の使はこれらの所  
ばかりを見物ありて、諸官人の屋敷町屋等はみ  
ず、これによりてしるしをかすゝ見たり。諸  
官人の家居等、唐様に候歟、又、日本の屋作に  
似候事歟。町々の躰いかゞ候歟。

答天界寺、圓覺寺僧、皆禪宗也。  
官家之屋、大寢庭階多用漢制。然書院、廣間

玄喫等、亦用日本制。至民家大概茅屋、頗似  
日本之民屋。

<sup>52</sup>山水、山甚た高からず、林木甚た茂からず。田  
地は多くは砂石ましりにて、天氣常ならず。焚  
たふぬれは、そのまゝ涼秋となる。但し、冬は  
霜雪あり。これは其国北へよりし故也。又、国  
の南に太平山有、西は古米山・鳥齒山、北に硫  
黄山・焚壁山・灰堆山・移山あり。焚壁の東は  
日本也。焚壁は本国より三百里なり。

是又、異朝の書にみえ候所にて、これらの山の  
名、唐音にてしるし候故歟、承及はさる所候  
いかゞ其国の象の推量にはしるるべく候歟。然  
わは、いつれの嶋にて山と申す事承度候。

答此一條内云、有霜雪、這一句不是了。琉球在  
震巽方位、地氣溫暖和煦、故無霜雪。雖然、  
當嚴冬間有雨霰。

又、国南有宮古島、曰太平山。其南、八重山  
島也。国人称宮古八重山、曰先嶋。又、国西  
有久米島、慶良間島。唐人呼之曰古米山。馬

53

齒山。又、北有鳥島、硫黃所出。又、有伊比屋島、伊江嶋、辺戸嶽。唐人記之曰「硫黃山」。

契壁山或作葉・移山・仄堆山。皆用唐音記者也。

衣服、男女衣服の制、異朝の書に見え候衣服は、此国にても見なれ候事にて相違なく相見え候。

女子の衣服の事、異朝の書にみえ候所候得共、是はこの国にて覈及はす候事故、一向に心得がたく候。神の託し候女君の事をしるし候事詳らかにて、三五百人も群をなし、その／＼草園といふものを戴きて樹枝を携へ、馬に乗候者これにしたかひ候ものありて、国王の宮中に至り候。但し、異朝の人の至り住し候所へは来らず、なと申事有之候、いか、候歟。右国中の女子の躰又は女君の躰など、わが国にて見及かたき事に候得は、もし此度も繪をも書候人来り候は、いかやうにも色とり分け候て見たく存候。

答神託女君三五百人、爲群戴草園樹枝等事、

古昔之事也、今無之。此度能丹青者不帶來、

不能爲繪也。

54

海巴、むかしは海巴とて貝を賤室の通用にし、異朝への貢物とす。

これは、此方にて申候宝貝などの類を用ひ候事も候歟。

答這一條是了。

55

武具、刀・劔・弓矢の類あり、弓は長し、鎧は皮革也。

是又、異朝の書にみえ候。弓は長く候歟。

答此又是了。弓、用桑木或他木堅者作也。比中

国之弓少長。

56

刑罰嚴重にして、のかるましき事を知る人は切腹して自害す。

これ又、異朝の書にみえ候。いか様の刑罰候歟。

答刑罰、有答・杖・徒・流・大辟・絞・斬・梟(梟)

首之條。行之決不赦犯、謀叛・惡逆・不孝、

不義等罪科者。但、輕罪間有宥赦之法。

57

薪、薪に螺殻を用ひ候由。

これ又、異朝の書にみえ候。いか、候歟。惣してのめらしき貝の類も有之候歟

答 昔者用鉄釜者少。故以海螺設炊爨。今亦窮邇  
迎陸向有之。

<sup>58</sup> 毒蛇、大明の時に勅使蛇のたりに難儀し候由。  
毒蛇、害をなし候事已候歟。我國にて申傳も、  
三線は毒蛇の害をのかれ候ためと申候。いか、  
候歟。

答 是了、有此説。

<sup>59</sup> 康熙三十七年此国を稱す人、琉球のために福建巡撫張仲學之申  
今に至る張仲學を案里候由。

是又、吳朝の書にみえ候。いか、さやうの事も  
有之候歟。

答 在我國中、案案仲學之事、未聞也。

<sup>60</sup> 福州に琉球館ありて、来る事は冬至を期とし、  
帰る事は端午を期とし、京師にては会同館に置  
る。

これ又、吳朝の書にみえ候所にて、惣して琉球  
館又は會同館などの家造り、廣狭いかやうに候  
歟。

答 這一條不差了。

一琉球館本廳、長十一二間、横八九間、左右長  
房、各長二十一二間、横五六間、又有一房、  
長八九間、横五六間、有天妃宮、長八九間、  
横五六間、俱為樓居、別有一房、長横各五六  
間。

一場門、長五六間、横二三間、頭門長三四間、

横二三間、以上作料從朝廷賜之。

一會同館、廣狹倍琉球館。

<sup>61</sup> 禮部衙門、これらの家造り廣狹、いかほど相  
同之候歟。

答 禮部衙門廣狹、倍會同館。然而未知其詳。

<sup>62</sup> 京師にて進貢使え滿州茶を給るよし、これは韃  
靼の本国の茶とみえ候。いか様の物に候歟。

答 滿州茶、曰奶子茶、用牛乳・黍粉・茶葉製之、  
如煎茶而濃。

<sup>63</sup> 封王の時、詔書を國王露台にて拜近られ候由、  
吳朝の書に候。彼國王の宮中に露台と申候所は、  
いか様の事に候歟。

答 封王時設露台、其製如舞台、構於殿庭之正面、以薄板蓋之。四面無門戶、有階級陞降。床高四五尺。龍亭詔勅、並綵亭錦帛、安置其中、勅使立其左右。又露台之前左、設南讀台。方九尺許、高一丈餘、其上置高案、讀詔官捧詔勅登台讀之。国王下拜、登露台受勅賜畢、請勅使宴北宮。

<sup>64</sup> 北京は北方に候へば、寒氣甚しき由に候。風聞の所、我國此比の寒氣よりは甚しく相聞候歟。答 北京、毎年十月河始凍、舟不能行。迄十一月、氷厚二三尺許、至十二月、又厚五六尺、其地氣寒故云。

<sup>65</sup> 近年は海上に海賊有て、長崎え渡来候唐船共、其難にあひ候者共も有之由に候。琉球よりの進貢船など、これらの難に逢候事は無之候歟。

答 自明末迄康熙二十年以前、台灣不平、多有海賊船。康熙九年庚戌冬、琉球進貢船一隻遭海賊、船中貨物人命皆没于賊手。又康熙十三年甲寅春、進貢船一隻、於賊船、琉人衛軍器合

力禦之、姑免其難。後、日本寛文年間、聞東寧船東長崎、託薩州太守告長崎御奉行、御奉行知其緣故、問東寧船、取還銀子賜本国。

<sup>66</sup> 只今清朝にての武職は、大方韃靼本国の人にて候。其人の舁、中国の人とはちがひ候様舁に相見之候歟。

答 清朝武職、任滿漢將官猛士如林。然其内、滿州人相貌魁梧、威風凜々者更多。

#### 四 「白石先生琉人問対」に他著との關係

才二節にかかけた六條への一へんの文言によつても知られる通り、向対と最も關係の深い著作は南島志であるが、その南島志と姉妹の關係に立つ琉球国事略も亦、つながりのあることいふまでもない。この二書のほか、多少關係あるものとして管見にふれた著作には、江南筆談・東雅等がある。先づ南島志との關係から見ると、(前掲六條の分は除き、他も左掲の分以外のものは省略する)

(1) 世系才二 「康熙二年、遣使冊封如前朝故

事。尚質遣使表謝。明年復奉表、賀即位。五年始勅、以「西年一貢爲例」。

○問対才5條 （以下條数のみをおける、勿論各條の答の部分が対応するもの）

(2) 官職才三 「親雲上、親近也、雲上殿上也。猶言堂上官也。俗稱親雲上、曰牌古米、或曰牌金。其義不詳。」

○問対才31條

(3) 礼刑才六 「凡刑典有笞杖徒流大辟絞斬梟首等法。而不赦謀反惡逆不道不孝不義等罪。若其輕罪、間有赦宥。」

○問対56條

(4) 食貨才九 「民間炊爨多用螺殼、蓋古俗也。海產大螺、貧家以代金甌。」

等に、両者の深密なつながりが見出される。

次に琉球国事略との関係を見ると、この方は既述の通り和文で簡略に書かれたものであるから、南島志の場合とは趣が異なるが、向対をとり入れたと思はれる文言は幾つか見えてゐる。即ち、

ii) 琉球冊封使并朝貢使の事

「今、大清の代となりし以後、其使臣の記載いまだ傳はらずの割註

但し、琉球の人の申す所を併と按ずるに、

明の代の例に大きにたがひし事とも聞えず、

○問対才63條

(2) 同右 「只今大清の代に至て、其国進貢の

例、前代の時に同じからざる事もあるか。割註

○問対才5條

(3) 同右

「三司官親方 正一品

天曹司 一員

地曹司 一員 之れ三公のふとく

人曹司 一員 なるもの歟

○問対才29條

また、江関筆談との関係は、左のごときものと

認められる。

(i) 青坪（註、副使）曰。琉球去此当幾千里……

白石曰。本邦里法五百里。……

青坪曰。福建往來之路。昔聞有海賊之出現者。商船亦無被劫之事耶。

白石曰。閩海寇賊。所未嘗聞。

。問対才55條

さらにまた、東雅との關係は次の通りである。

(1) 楓(の樹竹部)

此国にしてサクラといひ。カヘテといふもの、如きは。かしこ(註オラ)にはなし。

……琉球国の人に問ひしにも。其国には見えずといひけり。

。問対才43條

(2) 櫻(の樹竹部)

琉球・喝蘭陀等の国人のいひし所は。前の楓樹の下に見えたり。

。問対43條

以上のほか、もう一つの附け加へるべきものとして、琉球に関する白石の談話をそのまゝに記した加賀藩の医師小堀篁庵の書簡がある。その文はいま省略するが、白石の談話内容は、問対の記載へ

才31、46、56條)と相通ふものを含んでゐる(白石全集、才三卷、二七—二八頁、参照)。

## 五 餘 論

白石先生琉人問対には、白石の質問に答へた人物の名は記されてゐないが、南島志によると(職官三才)、白石と面会した人物としてその名のかかけられたものは、

慶賀使……(正) 奥那城王子、(副) 知念親方

謝恩使……(正) 金武王子、(副) 勝連親方

從官……宮里親方(程順則)、王城親雲(朝薫、漢姓名「向受祐」、砂辺親雲(漢姓名「曾曆」

等となつてゐる。この中、白石の質問に答へたのは、おそらく宮里親方、白石のいはゆる「文章之士」程順則と、王城朝薫(註リ)、砂辺親雲の三人であつたろう。通航一覽によると(卷十)、三人の職掌は、程順則は掌翰史、朝薫は榮正、砂辺は掌翰史となつてゐる(国書刊行会本才)。この正徳四年の際は、江戸での面談であり、二度目でもあつて、

落ち着いた気分でも十分の準備のもとに語り得たものと思はれるが、これに対し一回の正徳元年伏見での面会は、思ふやうに收穫もなかつたものであらう。但し、前掲の南島志中の文言（四・木）によつても知られる通り、官制についてきき、冠服について図をえがいてもらふやうなことがあつたやうで、絵の事は向対才弱條にも思へてゐる。此の点ではかへつて元年の方に收穫があり、四年の際は画師不参で白石の希望は十分に満されなかつたことになる。

右に、オニ回目の面談に當つては十分な準備のもとに臨んだと述べたが、朝鮮人やオランダ人の会談の場合と同様、この際も前以て白石は出来るだけ調査研究をしてゐたものと思はれる。その事は、向対の傾向の部分を見れば直ちにうなづかれるところであらうが、陳侃の使琉球録・袋中の琉球神道記をはじめとして、その参考文献は多数に上つてゐる。かりに南島志の文面にあらはれたものを掲げると、へこの中には此の面談以後に見

たものがあるかも知れない。引用順に掲げる）

星槎勝覽 琉球国図（鄭士） 皇明夷記

續日本書紀 廣輿図 閩書 續文献通

考 島夷志 隋書 中山世系図

日本書紀 唐書 延喜式 東鑑 宋

史琉球国列傳 世續図 皇明世法錄

大明会典 南浦文集 皇明三大征考

大明一統志

等がある。就中、使琉球録と琉球神道記とは、画書の著者が実際に現地に赴いて見聞したところのものであるだけに、大いに参考となつたりしく、引用の度数が最も多い。使琉球録については、オニ節のはじめに分類して掲げたところで推察され得ると思ふが、それはあらゆる方面にわたつてゐて、白石の知識慾の旺盛と博識とを感歎せしめるものであると同時に、その政治的関心（廣義）の度合も高かつたこと、その南係事項が過半を占めること（一）（四類）に徴しても明らかである。

最後に、この向対そのものについて卑見を附け

加へると、さきにもふれたやうに、本書は白石自身の纂輯にかゝるもので、後に残さうといふ意図をもつものであつたと考へられる。へ但し、「白石先生疏人向対」といふ書名は別人がつけたものであることいふまでもない。この点は、白石先生紳書など同一視してよいであらう。)

形式の似るのは、断片的なものに過ぎないが阿蘭陀語向目(栗田元次教授の命名にかかる)で、白石の眞向事項の大体があらかじめ用意され、實際の面談においては若干別の事項が追加されるといふ方法がとられたものらしい。この向対の場合についていへば、答辭の部分(漢文体のもの)は、白石自身がメモしたものであること疑いない。それを後日、本書にみられるやうな向答体にまとめて一書としたものであらう。因みに、オランダ人との対談のメモは、「外国之事調書」として現存するが、朝鮮使節との対談の方は、白石自身のものとしては半向筆語の方だけが残り、江國筆談の方は正使趙泰億の纂輯のものが伝はつてゐる。勿

論、何等か覺書的のものはあつたに違ひないが、現在は失なはれてゐる。(註15)これら覺書類の示すところは、白石の眞摯な學向的態度である。形影夜話に見える次の一節など、白石の學究者としての態度を活々と傳へるものであらう。

「白石先生は世にも知れる博學高識の人なりしが、平日意を用ゆる事も尋常ならざりしと聞ゆ。或時、夜話に居りし人々ありしに、何れも暇告て歸らんとせし時、先生云、各はよき覺とみえたり、羨しき事也、と申給ひしに、人人口をそろへ、何故左はの給ふを、我々は記憶あし、と申せしかば、先生、いや左にあらじ、孰れもは皆、宵よりの咄記憶せらるゝと見えたり、我は記憶あしきゆゑ、宵よりの咄一つ、かく頭付し置也、各歸られし後は清書し侍る也、と申給ひけると也、と云々(白石先生著述目錄附録、全集才六卷)

本稿は、「白石先生疏人向対」の内容の紹介を主眼としたものである為、論じ残したことが多い。

白石の琉球研究全般については、後日改めて論述を試みるつもりである。

## 註

(1) 内題は、「琉球東聘日記抄」となつてゐる。寛永二十一年から天和二年までの間における東聘時の記事を含む。詳しくは、拙著『新井白石の研究』一八〇頁、参照。

(2) 栗田文庫所藏の南島志には、精密な地図が附されてゐる。故栗田元治教授著『新井白石の文治政治』一六三八頁、参照。

(3) 拙著『新井白石』一四、詩人白石の章、参照。

(4) 本誌(『国史研究』)所載の拙稿「新井白石の世界認識」、及び拙者、白石の研究、三七九―三八〇頁、参照。

(5) また、蝦夷志と併せて南北倭志といふ呼び方もなされゐる。白石の研究―三七三、三七四、三八一頁、参照。

(6) 異朝の書に見えし琉球国の事、の部分中、

鄭廻につき「南島志には鄭礼とあり、今また諸書を参考し廻に従ふ」(全集才四 六五九頁)と記したところにより、それが知られる。

(7) 本書は全二十三丁(扉の一枚を除く)で、二十三丁目は表だけに止まつてゐる。而して、かりに頁をつけるならば、IはR1―R3、IIはR4―R4、IIIはR5―R5、IVはR6―R6、といふ構成となる。

(8) 南島志のこの一節に対して東恩納寛惇氏は、「すべて誤りである。けだし牌古米はペークミ―、牌金はペーテンの対音である。」云々といはれ(『琉球の歴史』一七と頁)、また「牌金は清音ペーテンと親雲の方音を写したものである」といはれて本文にあはた小瀬復庵の書簡を引き、「この文意を見ると、白石自身も『ペーテン』ではなく、『ハイキン』と訓んでいた事が推知される。」ともいつて居られる(『琉球の海外発展』―歴史教育六の八)。琉球国事略では、はつきり「ハイキン」と振假名をつけてゐるか

ら、白石がさうよんだことは疑ひない。たゞ、向題の南島志の一節は、向対によつても判る通り、琉球使節の答辭をそのまゝとり入れたと思はれるので、改めて東恩納氏の高見をうかゞひたく思ふものである。(清音、方音については筆者は無知であるから御散末を仰ぎたいのであるが、白石がこの「牌古米」「牌金」の文字で表示したのは、「ハイキン」の音で書きとつた為ではなからうか、といふ疑向が残る。)

(9) 向対才59條によれば、福建巡撫張仲峯の象祠のことは否定された形になつてゐるのに、事略に、左のふとき記事が含まれてゐるのは、どういふわけであらうか。

「これよりさきは、其国の使福州の長官に送る所の例、萬金を費す、康熙三十三年本朝元也巡撫官張中峯、一槩に謁受としかは、其国の人、彼德に感じて今に至る迄これを記る」

(全集才三  
六六七頁)

(10) 東恩納氏は、白石との対談者は、この程順則であつたであらうとされてゐる。前掲論文。

なほ、程順則のことは同氏の前掲著書に詳しい一〇〇頁。

(11) 伊波普猷氏は、白石の相談相手となつたのは、沖繩の伝説に精通してゐた玉城朝薫等であつたといはれる。「古琉球」、一五〇頁。

(12) 新井家所藏「各国人の図」(卷子本)中に、琉球人もえがかれてゐる。拙著、白石の研究、八〇五頁、参照。

(13) 前掲、栗田著書一六三四頁、参照。

(14) 拙稿「外国之事調書」(史学雑誌六六の四)、参照。

(15) 内藤虎次郎博士は、趙家に伝はる白石筆の江南筆談(一部分)を認められたといふ。「白石の一遺聞に就て」(『先哲の学向』、所収)。

#### (附記)

本論考は、昭和三十三年度科学研究費による研究の一部をなすものである。